

小満やどの田も水を湛へをり

小島雷法子

暦のうえでは夏に入りました。5月20日は二十四節気の一つ「小満」。気候が穏やかさを増すとともに、麦の穂が育ち、野山の草木が実をつけ始め、万物が大きく成長する季節です。里山では水を湛え田圃で、田植えが本格的に始まっています。

4月から5月は新型コロナウイルス感染拡大により、生徒諸君も教職員も出鼻を挫かれた感がありました。ようやく学校が再開されましたので、遅れを挽回すべく、感染防止に努めながら、教育活動に全力で取り組んでいきます。コロナ時代の「新しい生活様式」を受け入れ、今はぐっと耐えて学習に取り組んで欲しいと思います。一日でも早く通常の生活リズムに戻ることを切に願っています。

おすすめ書籍



多和田葉子著『百年の散歩』（新潮文庫）

多和田葉子氏は、私が最近気になっている小説家です。ドイツに住み日本語だけではなくドイツ語でも作品を発表しています。

1993年に「犬婚入り」で芥川賞受賞。国際的な文学賞も数多く受賞しており、今、注目を集める作家の一人です。「百年の散歩」は、

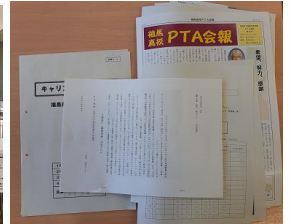
ベルリン市街に実在する10の通りを歩きながら重ねた著者の思索と夢が描かれています。光と影に彩られたベルリンの歴史が浮かび上がり、読む者を不思議な世界に誘う魅力的な作品です。ふだん何気なく歩いている通りには、私たちが知らない物語が隠されているかもしれません。

臨時休業の延長に伴い個別面談を実施しました

4月28日、県教委より新型コロナウイルス感染症対策のための一斉臨時休業の延長について通知がありました。臨時休業の長期化を受け、本校では連休明けの5月8日から15日までの6日間、生徒に個別に登校してもらい、担任との面談を実施しました。担任が生徒一人一人の様子を把握するとともに、学習課題の進捗状況、新たな学習課題の配付、家庭での過ごし方、進路等について、生徒と直接言葉を交わすことで、きめ細かな指導に努めました。久しぶりに登校した生徒の表情は一応に嬉しそうです。

教室を覗いてみると、先生方が生徒との距離を確保した

り、飛沫を防止するビニールシートを準備するなど、感染症対策に心がけながら面接を行っていました。廊下で面接待ちをしていた生徒数名に元気で過ごしていたか尋ねたところ、「計画的にやっています」「適度な運動をしながら過ごしていました」という声の一方で、「もう限界に近いです」「早く学校に来たい」という声も聴かれました。私たち教員も試合のないスポーツ選手のように、何となく張り合いのない心持ちであり、やはり「生徒あっての学校である」ことを痛感しています。



122年目の春を迎えて ～本校の創立記念日に想う～

5月7日は創立記念日でした。明治31（1898）年のこの日、本校は福島県第四尋常中学校として開校しました。当日は入学式が行われ、新入生161名が本校の門を叩いています。9日からは中村高等小学校（現在の中村第一小学校）の一部を仮校舎として授業が開始されました。翌年には本校舎の完成と同時に移転し、ここ大手先の地が相高健児の揺籃の地となりました。その後、福島県相馬中学校、福島立相馬中学校、福島県立相馬高等学校と変遷を経ながら、今日に至っています。

本校122年の歴史を顧みれば、諸先輩たちが輝かしい伝統を重ねてきましたが、戦前・戦後の長い年月の間に戦争や災害など様々な困難もありました。しかし、その都度、学校関係者が一丸となって乗り越え、学校を守ってきま

した。卒業者数は2万人を超え、国内外で活躍しています。相双地方の基幹校として、有為な人材を輩出してきた本校の使命は、今も昔も変わりません。今回の新型コロナウイルス感染拡大の脅威に対しても、生徒諸君、保護者の皆様、教職員が協力し

合い、困難を克服できるものと確信しています。皆で知恵を出し合い、この難局を何とか乗り越え、本校に期待された役割を果たしていきたいと思



左：明治32年頃の校舎

下：第一回卒業生



教育活動が再開しました (5/25～)

5月14日、政府が福島県を含む39県の緊急事態宣言の解除を決定したことを受け、5月15日、本県の緊急事態措置が解除されました。県立学校では5月25日から段階的に教育活動が再開されることになりました。本校はすでに18日から分散登校による授業を実施しており、今月末まで当初の計画にもとづき授業を実施します。具体的には各学年を2班に分け一日おきに登校し、さらにクラスを2グループに分割して、午前中3コマの授業を行っています。1・2学年は国数英を中心に、3学年は選択科目を中心に特別時間割を編成しました。校舎を巡回し授業を見てみると、生徒

は授業に集中し真剣そのものでした。換気をした上でマスクを着用し、十分な間隔を確保して着席するなど、感染リスクの軽減を図るよう努めています。6月1日からは通常の授業を実施します。6月8日からは部活動も再開されます。生徒諸君が登校し、学校が活気に溢れる日はもう少しです。学業と部活動に生き生きと取り組む生徒の姿が見たい。教職員共通の願いです。



校舎点描 (5/8～5/22)



- (A) 臨時休業中の注意事項を記した黒板
- (B) 教室消毒用の次亜塩素酸ナトリウム液を入れたタンクを準備しています
- (C) 生徒諸君には校舎東側で屹立するヒマラヤ杉の大木のように大地に根を張りたくまっすぐに成長して欲しい
- (D) 本校名物の至る所に貼られているラーニングピラミッド
- (E) 中村神社と日鷲神社の御利益がありますように！
- (F) 「コロナに負けるな！」の書き込みはみんなの思い
- (G) あるクラスに貼られた標語から担任の熱い気持ちが伝わってきます。
- (H) 「しばらくは離れて暮らすコとロとなつぎ逢ふ時は君といふ字に」(書道室に貼られた作品より)
- (I) 3学年を対象とした進路指導主事による進路講話のひとつコマ

同窓生列伝⑬折笠晴秀 (1885-1965) 続編 ～馬城会と母校発展に尽して その1～

今回は折笠と馬城会の関係について見ていきます。明治36年4月、旧制相馬中学校が第1回の卒業生を出したことを受けて、卒業生と教職員を中心に馬城会が結成されました。馬城会は相馬中学及び相馬高校を卒業した者で組織する同窓会であり、設立当初の目的は「同窓ノ好ミヲ重シ、其ノ動静ヲ通報シ、常ニ交誼ヲ厚クスル」ことにありました。同年8月には原釜の望海楼で記念すべき第1回総集会が開催され、卒業生総代だった折笠も参加しています。集会は参加者が互いに胸裡を吐露して寛ぎ、入学試験や地方のことを報告し合う楽しい会であったと伝えられています。

草創期の会長は校長がその任に当たり、卒業生は通常会員になる義務がありました。その他に教職員から賛助員、土地の名望家から名誉会員が選ばれています。

ほどなくして馬城会東京支部が結成され、折笠はその中心となって運営に当たりました。定期的に行われた支部会は、神田区今川小路にある「玉川亭」が会場と決まっていたようで、毎回、開会の挨拶後、会員の演説や講話とつづき、最後は盛大な宴会が催され、歌や踊りが繰り出されました。明治39年第10回支部会では、折笠が中山道への旅行談を披露しています。当時の折笠は東京帝国大学医科の学生で、学業の合間に信州方面を旅行したようです。

大正時代における折笠と馬城会の関わりについては、資料がなく詳らかではありませんが、昭和に入ると再びその関係が確認できるようになります。

昭和7年、創立35周年記念事業として、馬城会が発起人となり講堂が建設されました。すでに泌尿器科の名医となっていた折笠は、東京支部の代表の一人として母校講堂建設委員に名を連ね、15円の寄付を行っています。

昭和11年6月、馬城会東京支部のメンバーが中心となり在京卒業生母校訪問団が結成され、折笠もその一員として来校し大歓迎を受けました。来校した13名は多士済々で、折笠のほかに帝国ホテルを設計したフランク・ロイド・ライト

の愛弟子で建築家の遠藤新氏(第6回卒)など錚々たるメンバーでした。当時の「学友会雑誌」には生徒の感想が残されており、それによると先輩達は学生時代の懺悔話、自己の経験談、現在の活動について講演を行い、生徒達に強い印象を与えました。5年生の銚建孝は次のように記しています。

『我々も卒業後、実業に着く者は真面目に働き、上級学校に進む者は一心不乱に勉強し、必ずや有為の人物となり、大先輩の名を辱めない立派な人間になるやうに覚悟せねばならぬ。』夕刻からは訪問団を囲み臨時馬城会が開催されました。

同年11月、京浜地方の学校に学ぶ卒業生の親睦を目的に京浜学生馬城会が設立されました。学生による普通会員、先輩有志による賛助会員で構成され、設立総会で折笠が会長に選出されました。12年5月、京浜学生馬城会の新入会員歓迎会が馬城会東京支部と合同で行われました。この時、折笠から渡邊扶(たすく)氏(2回卒)に会長職の交代が行われ、折笠の尽力に対して「満腔の敬意」が払われました。またこの月、京浜学生馬城会が行った母校修学旅行団歓迎では、旅行団が相馬子爵邸を訪問した際、折笠が馬城会東京支部長代理として歓迎の挨拶を行い、後日、学校から折笠宛に礼状が発出されています。

ところで、それまでの馬城会東京支部は明確な組織がなく、「必要に応じて数名の先輩の肝煎で存続」していました。そのため、会員全体の融合連絡に欠けるところがあり、「会員の縦断的横断的な親睦を増進する」ことが喫緊の課題となっていました。これを受けて昭和13年11月、組織の再統一・再強化を目的として新たに京浜馬城会が誕生します。新橋の「太田屋」で開かれた総会では、それまでの経過報告が行われた後、規約が可決され、つづいて役員が選出されました。会長に渡邊扶氏、副会長に遠藤新氏が選出され、折笠はこれまでの馬城会東京支部の功労者として、会員一同の感謝の中で顧問に選出されています。